



Title	敦煌石窟出行図研究の現状と課題
Author(s)	岩本, 篤志
Citation	敦煌石窟における供養人像の歴史学的研究. 2020, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/75897">https://hdl.handle.net/11094/75897</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 敦煌石窟出行図研究の現状と課題

岩本 篤志

はじめに

敦煌石窟には出行図が描かれた複数の石窟がある。出行図とは、高位者が配下を連れて行列をする様子を描いた図で、一定の儀礼制度の形式に従っているとされる。岩本〔2019〕では、出行図に関する先行研究をまとめ、特に遅い時期の制作とみられる榆林窟第12窟「慕容帰盈出行図」が描かれた背景を探った。

これに関して、まず莫高窟と榆林窟の出行図について概観しておきたい。莫高窟第156窟には、「張議潮統軍出行図」（以下、張議潮出行図）と夫人の「宋国夫人出行図」が、莫高窟第100窟には、「曹議金統軍出行図」（以下、曹議金出行図）と夫人の「回鶻公主出行図」がある。また隣接する瓜州に位置し莫高窟と並び称される榆林窟第12窟には、「慕容帰盈出行図」（以下、慕容氏出行図）と「慕容夫人曹氏出行図」がある。また、この他に張淮深期の開窟とされる莫高窟第94窟にも出行図の一部を見ることができるとともに、莫高窟第12窟、第329窟や同第334窟等にはこうした出行図に描かれた供養人像と類似した描写がみられる。

出行図について、張先堂〔2008〕は、「これはすなわち仏に拝礼し供養する仏教石窟に個人の顕彰をもちこんだものであり、一族の功德と繁栄をねがう家廟あるいは一族の記念的性格を有する。その影響を受けたのが、莫高窟第100窟「曹議金出行図」「回鶻公主出行図」、榆林窟第12窟「慕容氏出行図」と「慕容夫人曹氏出行図」であり、これらも家廟的な性格をもつ家族功德窟である」と述べている。

では曹議金の出行図は、張議潮のそれをどのように踏襲し、節度使でない慕容帰盈の出行図はそれらとどのように異なっているのか。岩本〔2019〕では、慕容帰盈夫妻の出行図が作成された背景について先行研究をまとめると同時に、張議潮と曹議金の出行図の比較をおこなった。本稿では、岩本〔2019〕を総括すると同時に、あらためて課題や疑問点として明示することで、今後の検討にいかすものとしたい。よって細部の論証については、岩本〔2019〕を参照されたい。

## 1. 出行図が描かれた背景

### (1) 莫高窟の出行図の場合

まず出行図が描かれた背景について、前稿で論じたことをまとめておきたい。

敦煌は祁連山脈からの水源で潤うオアシスに位置し、交易や軍事の拠点として開発・定住がすすめられた。漢代以降、中原王朝が西域への拠点をおいたが、五胡時代には独立した政権の中心拠点ともなった。敦煌の東南に位置する鳴沙山の断崖に石窟（莫高窟）が開かれはじめたのはちょうどその頃、4世紀のことであり、7世紀の隋の成立以降は、敦煌はふたたび中原王朝の西域方面への前線基地となった。またこの地では元代に至るまで1000年近く造窟が続けられることとなった。

786年に敦煌は吐蕃に占領されるにいたったが、848年に張議潮がその地を奪取、唐は帰義軍節度使として官職を授けた。以後、この張氏から姻族であった索氏をへてまたその姻族である曹氏に至るまで、時の中原政権であった後唐や北宋から官位を授かりつつ、また周辺国や諸勢力と均衡をはかりながら、この地を200年近く治めた。その間、彼らは石窟寺院群を影響下におき、宗教都市を演出した。敦煌莫高窟には彼らが開窟、または重修という形で窟を荘嚴するための寄進をおこなった石窟が多数あり、そうした窟内主室下部や甬道に自身や親族を供養人像として描かせた。

出行図はこうした供養人像の一種とみなすことが可能であるが、莫高窟の出行図は、この地の支配者であった帰義軍節度使の栄光をたたえる側面があったと推察される。

### (2) 榆林窟第12窟出行図の場合

一方、唐以降には莫高窟のみならず、少し離れた踏实河（榆林河）沿いの崖の榆林窟においても開窟がはじめられた。とりわけ曹氏帰義軍期には榆林窟での開窟は積極的に行われた。その第12窟には慕容歸盈と妻の出行図があることが知られる。しかし出行図が作られた人物は限られており、帰義軍政権で一目置かれた存在であったとみられる。では慕容歸盈とはどのような立場にあった者なのか。

慕容歸盈とは、これまでの研究によれば、10世紀前半に瓜州刺史に任じられた人物とされる。彼は沙州を治めた節度使、曹議金（在位914～935年）とほぼ同時期（914?～940年）に瓜州刺史の任にあり、時の中原の後唐政権には曹氏と別に朝貢をおこなっており、吐谷渾の部落から成る墨離軍にも影響力をもっていたとされる。慕容氏は墨離軍とかかわりのある瓜州に隠然たる力

をもっていたようで、曹氏は慕容氏と通婚関係を結んだ。ただ、あきらかに彼はあきらかに帰義軍節度使ではない人物であった。

先行研究では、慕容帰盈の妻を曹議金の姉とみるか娘とするかで議論が分かれている。これについて筆者は、議金の姉とする説を支持した。また、このような姻戚関係が保たれたのは、慕容氏が曹氏帰義軍期に墨離軍と瓜州において隠然たる力を持っていたためとみられる。一方で曹氏が慕容氏と緊密に姻戚関係を結んだ結果、後になるほど慕容氏の瓜州における独特な存在感は薄められたと推測される。この石窟の供養人像や出行図は、当時、曹氏節度使に姻族としてとりこまれていった慕容帰盈の孫たちが、974年頃に描かせたものであり、慕容氏の立場が供養人像や出行図の描き方に反映されていると考えられる。

## 2. 出行図の構成の研究とその課題

### (1) 莫高窟第156窟と莫高窟第100窟の概観

では出行図はどのような意図を持って描かれたのか、また複数の出行図には相互関係はあるのか。慕容帰盈夫妻の出行図の分析の前提として、莫高窟第156窟の張議潮出行図と第100窟曹議金出行図に関する比較をおこない、その特徴を探った。まずそれぞれの描かれた年代について先行研究をまとめると以下のとおりである。

第156窟の張議潮の出行図の像の傍題には「河西節度使檢校司空兼／御史大夫張議潮統軍□／除吐蕃取復河西一道行品」とある。この官銜をもとに、出行図作成年代を861年から張議潮の入朝した867年までとする説と、851～858年とする説がある。

第100窟の曹議金の出行図については、推定される窟主や関係する敦煌文献の分析によって、曹議金没後の935～940年であるとする説と、曹議金在世中の931～935年に造窟が開始され、939年以前に竣工されたとする説がある。

筆者はいずれの説を支持するか示しておらず、今後、検討の余地を残した。

### (2) 張議潮出行図と曹議金出行図の比較

出行図分析の際の基本史料は、9世紀書写とみなされる敦煌文献P.3773v「凡節度使新授旌節儀」で、節度使の隊列の様相を示しているとされる。

一方、張議潮出行図と曹議金出行図の隊列には相違点が存在することが指摘されており、寧〔2012〕は、以下の3点を挙げていた。

- A. 皇帝出行時の最前列の導駕のための官員「執毬杖供奉官」がいること。

- B. ウイグルの使者の標識である回転して打ち鳴らす白鶴形状のものがあ  
ること。
- C. 張氏出行図に一組の楽隊しかいないのに対し、曹氏出行図には前後に  
二組存在すること。

そして A と C によって、曹氏出行図に唐代的でなく、より宋代に近い特徴を見いだせることを指摘する。前稿では、これに対する明確な反論は示さず、詳論を避けたが、現地で確認した限りでは確実に A と比定できる服装・持ち物を有する人物像はみあたらず、C については、前稿で示したようにその解釈はわかる。また B についても、その図像解釈には疑義があり、指摘されているものは槍や旗の飾り房である可能性もすてきれない。つまり、両出行図の比較は今後、より慎重におこなわれる必要がある。ただ張氏出行図はほぼ全体の写真が公になっているのに対して、曹氏出行図のものは一部が公にされているのみである。

次に両図の共通する部分をみていく。とくに旌旗については、先行研究では節度使のシンボルである六纛や旌節がどのようなものかについて見解は一致していたものの、五方旗については、研究により異なる形状の旗に比定されている。つまり、このような出行図の隊列の様相分析についても課題とすべき点は少なくない。

一方、張氏出行図は、帰義軍節度使配下の官職名を傍題に記しており、これが今後の研究に資するところは大きい。左馬歩都押衛等、衛前兵馬使、銀刀官については、史料から職掌がわかるため、出行図とあわせて、その服装や持ち物を把握できる。

また節度使像の後方に描かれた数名から数十名の騎上者が「子弟軍」で、先行研究ではこれを「左右廂子弟虞候」に比定する。馮〔1997〕によれば、節度使の信任を受けて監察・治安維持を掌る都虞候のもとにおかれた役職で、彼らの多くが節度押衛をも兼任していたとする。また張氏出行図では彼ら、子弟軍のいずれかが、宝刀、弓、胡祿（箭囊）、扇を分担して掲げており、この点は曹氏出行図でも共通する。これらの道具は、甬道に節度使かそれに準ずる供養人像が描かれた場合にも後ろの従者が持っている。

このように両節度使の出行図は、行列が旌節と六纛、節度使を中心に構成され、伎楽隊と衛官も配置するといった基本的内容はほぼ同じである。また、しかるべき権威を授けられた者として身につけるべき旗や旌節のみならず、節度使であることを示す持ち物を、出行図内に意識的に描いている点も共通する。総じて甬道の供養人像同様、身分に応じた「描き方」があったことはあきらかである。しかし、排列や道具に関する個々の比定には違いがあり、あらた

めて考察の余地があろう。

### おわりに —— 今後の課題

以上は前稿をまとめたにすぎないが、このようにみていくと次のような課題がうかんでくる。これらについて説明を補足しておきたい。

- ① 敦煌莫高窟・榆林窟の出行図の編年的分析
- ② 帰義軍節度使出行図の構成の再考察——張議潮・曹議金出行図の比較
- ③ 慕容歸盈夫妻の出行図の構成の分析

①については、前述のとおり、張議潮・曹議金両夫妻出行図の成立年代にも議論の余地がある。また3点の出行図以外についても編年の視野に入れる必要があるだろう。

②については、前述の通り、先行研究の分析は必ずしも仔細とは評価できず、各出行図に描かれた複数のものが、彼らのどのような立場の表徴として描かれているか不明な点が多く残されている。

③については、帰義軍節度使の出行図の特徴は、旌旗と参列者に示されており、その点では瓜州刺史であった慕容氏の隊列の同様とみられる（図：上2段の破線の円内）。一方で夫人の出行図には旌旗はみられず、輦輿や手輿の類が描かれている点に特徴がみられる（図：下2段の破線の円内）。これらが身分の表徴であることは帰義軍節度使夫妻の図から明らかである。今後こうした点に留意して論を展開していくこととしたい。



図：慕容歸盈夫妻出行図  
 (上2段：慕容氏出行図、下2段：慕容夫人曹氏出行図)

## 主要参考文献

〔和文〕

- 赤木崇敏〔2016a〕「曹氏帰義軍時代の瓜州オアシスの統治権——瓜州オアシスからの陳情書 P.ch.2943——」, 坂尻彰宏(編)『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』, 大阪大学, pp.1-24
- 〔2016b〕「曹氏帰義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像」, 『敦煌写本研究年報』第10号, pp.285-308
- 〔2017a〕「曹氏帰義軍節度使系譜攷——2つの家系から見た10~11世紀の敦煌史」, 土肥義和・氣賀澤保規(編)『敦煌・吐魯番の文書世界とその時代』, 東洋文庫, pp.237-261
- 〔2017b〕「莫高窟第202・205窟の供養人像」, 松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.484-489
- 赤木崇敏・坂尻彰宏〔2017〕「榆林窟供養人叙録選注」, 前掲『敦煌石窟多言語資料集成』, pp.403-481
- 荒川正晴〔1989〕「唐の中央アジア支配と墨離の吐谷渾(下)——主に墨離軍の性格をめぐって」, 『史滴』第10号, pp.19-42
- 岩本篤志〔2017〕「榆林窟第12窟——慕容夫妻出行図の解説」, 前掲『敦煌石窟多言語資料集成』, pp.482-483
- 岩本篤志〔2019〕「敦煌石窟出行図小考——榆林窟第12窟慕容氏出行図の成立をめぐって」『立正大学人文科学研究所紀要』第56号, pp.17-32
- 坂尻彰宏〔2018〕「帰義軍節度使と公文書処理」『内陸アジア言語の研究』第33号
- 土肥義和〔1980〕「帰義軍(唐後期・五代・宋初)時代」, 榎一雄(編)『講座敦煌2 敦煌の歴史』大東出版, pp.235-296

〔中文〕

- 陳明〔2006a〕「關於莫高窟第156窟的幾個問題」『敦煌學輯刊』2006年第3期, pp.90-96
- 〔2006b〕「慕容家族与慕容氏出行図」, 『敦煌研究』2006年第4期, pp.25-31
- 陳菊霞〔2007〕「再議 P.5032(9)「沙州闐梨保道致瓜州慕容郎阿姉書」的定年及相關問題」, 『敦煌研究』2007年第2期, pp.70-73
- 敦煌研究院編〔1986〕『敦煌莫高窟供養人題記』, 文物出版社
- 馮培紅〔1997〕「晚唐五代宋初帰義軍武職軍將研究」, 鄭炳林(編)『敦煌帰義軍史專題研究』蘭州大学出版社, pp.94-178
- 郭鋒〔1989〕「慕容帰盈与瓜沙曹氏」, 『敦煌學輯刊』1989年第1期, pp.90-106, 同著『唐史与敦煌文献論稿』, 中国社会科学出版社, 2002年再録, pp.266-294
- 〔1991〕「慕容帰盈出任帰義軍瓜州刺史前的身世」, 『敦煌研究』1991年第4期, 前掲同著『唐史与敦煌文献論稿』再録, pp.295-307
- 賀世哲〔1986〕「從供養人題記看莫高窟部分洞窟的营建年代」, 前掲『敦煌莫高窟供養人題記』pp.194-235
- 暨遠志〔1991〕「張議潮出行図研究——兼論唐代節度使旌節制度」, 『敦煌研究』1991年第3期, pp.28-40
- 米德昉〔2016〕『敦煌莫高窟第100窟研究』, 甘肅教育出版社
- 寧強〔2012〕『敦煌石窟寺研究』, 甘肅人民美術出版社

- 張 先堂〔2008〕「莫高窟供養人画像的發展演變——以仏教史考察為中心」、『敦煌學輯刊』2008年第4期, pp.93-103
- 張 伯元〔1995〕『安西榆林窟』, 四川教育出版社
- 周 倩倩〔2017〕「敦煌慕容氏家族研究綜述」, 『2018 敦煌學國際聯絡委員會通訊』, 上海古籍出版社, 2018年7月, pp.117-125

[謝辭] 本研究の前提となる調査に際しては、敦煌研究院から多大なご支援、ご理解をいただきました。特記して謝意を表します。また、本研究はJSPS 科研費JP16K03083 の助成を受けたものです。